

# 1. 栗笠の歴史

烏江・船附と共に濃州三湊の一つとして、中世から近世にかけて、西濃地方の交通・交易・経済の要衝として栄えたところである。現在は、たびたびの牧田川改修工事によって湊の面影はすっかりなくなってしまったが、市神社の境内に移されている湊の灯明や町並に昔の湊町としての名残がある。栗笠は「和名抄(正式名称は倭名類聚抄)」に記載されている富上郷であろうと考えられる。大日本史の註にも、「富上之上、疑つちのあやまりならん土之譚、今郡東栗笠村有<sub>二</sub>福地祠<sub>一</sub>、即其遺名」(意味：富上の「上」の文字はおそらく「土」の間違いでであると思われる。現在、郡の東の栗笠村に福地神社がある。この名前はその名残である)、とあるように、富上は富士の誤りで、福地の祠があるのは、その名残であろうという。栗笠専了寺の慶弔元年(1596)の文書には北村郷栗笠村の北村天神の御遷宮をしたと記され、享保4年(1719)の文書には北村之郷と記されている。

江戸時代になると、栗笠は元和元年(1615)に下笠・船附・大野・上之郷・烏江などとともにも幕府の直轄地となり、下笠にいた幕府の代官石原清左衛門の管轄下になったが元和五年(1620)尾張領となった(上之郷は幕領のまゝ残った)。後、尾張藩の付家老今尾城主竹腰氏の領地となって明治維新まで続き、明治四年七月廃藩置県の時今尾県となり、同年十一月岐阜県の所轄となった。

栗笠の村高(その村の年貢などの基準になる米の収穫高)は、慶長一八年(1613)の「美濃一国郷牒」では五八四石余、正保二年(1645)の「美濃凶郷帳」では六〇四石余ほかに新開地六八石となっており、沼新田や五島新田が開発されたことがわかる。明治維新当時では九六一石四斗七升七合、総反別八五町拾四歩である。明治五年(1872)八六五石余、新田高九九石余、堤外金草川沿い新田一二石である。戸数・人口は次の通りであった。

年代	石高
慶長一八年(1613)	584石
正保二年(1645)	604石、新開地68石
明治維新当時(1868)	961石4斗7升7合
明治五年(1872)	865石、新田等111石

年代	戸数・人口
元禄一六年(1703)	115戸・567人
寛政十年(1798)	156戸・820人
明治五年(1872)	172戸・781人
明治十四年(1881)	193戸・844人

(明治三〇年(1897)笠郷村の大字、昭和二九年(1954)養老町栗笠となる。昭和四七年から字仲田に住宅団地が造成されている。)

里伝によれば、栗笠村は現在の南方北村の地にあったが、いつの頃からか、牧田川沿いの現地に移住したといい、福地神社ももとは北村にあった。今でも付近の畑地から弥生土器や須恵器の破片が出土するからかなり早くから開けていた。

「尾州藩古義」に、『享保17年(1732)より六齋市。』と記しているように、毎月、日を定めて6回市が開かれていた。今も村の東端に市の神様である神大市比売(姫)を祭神とする市神社が祀られている。

「濃州徇行記」は寛政年間(1789~1800)にできた本であるが、この本には栗笠村の繁栄ぶりを次のように記している。

- 一、此村は牧田川の堤の南傍に民戸建ならび牧田街道筋にて町並なり、湊ゆえ農商を兼ねたるもの多し、町長は東西三町(約 327m)ほどあり、町の名はなきよし、酒屋・味噌屋・小物屋・紺屋(染め物屋)・菓子屋 其外小商をする家余程みえたり、其内佐藤与三郎・佐藤文四郎富戸(金持ち)にて家づくりもよし、湊問屋を佐藤次郎左衛門と云、御役船(役船とは、公役のため民間から差し出す舟。艀船は平田船のこと。海でも舟運のできる大きな船で 70 石~100石積(10石=1804ℓ=1m×1m×1.8m))六艘と鵜飼船(鵜飼を

する船ではなく荷物船で 20~50石積)四艘、御役船の外 船<sup>ひらたぶね</sup> 二艘、四っ乗<sup>よのり</sup> 一艘、藻取船<sup>もとり</sup> 八艘ありて  
 此は船かせぎをする家八戸ほどある由、岐阜より 商<sup>あきな</sup> い上せ荷物多くこの湊へ 着<sup>ちやくがん</sup> 岸し、茶荷物も来ると  
 なり、みるところ村にぎわしく豊<sup>ほうじょう</sup> 饒<sup>い</sup> (土地・海等からの恵みが多く豊かなこと)の地なり、其<sup>そのほかかしら</sup> 外 頭 百姓を佐  
 藤丈三郎・佐藤安三郎、庄屋宇内と云、又前に記す文四郎と与三郎なり、

○此<sup>このむらたづら</sup> 村 田 面<sup>い</sup> は東南の方船附村の間へ長く出張り地高くして水深溜<sup>たま</sup> りなく良地也、田面の字を仲田・村前・沼・  
 猿橋・蓮池、内草場など云えり、筋かいに烏江村・江月村 悪<sup>あくすい</sup> 水 落<sup>おちえすじ</sup> 江筋あり。(昭和三五年の土地改良工事で  
 なくなった。)

一、早戸大明神境内一<sup>たん</sup> 反<sup>せ</sup> 二畝(約1200㎡)村除也、此<sup>このやしろ</sup> 社 は村内入口左の方にあり、宮づくりよし、福地大明神  
 境内一反五畝七歩(約1500㎡)(その 址<sup>あと</sup> に 標<sup>ひょうちゆう</sup> 柱<sup>ちゆう</sup> が建っている。)、白山権現社一畝十歩(約133㎡)(その  
 址に標柱が建っている。)共に村除也、村の南にあり。(この記述によって、西暦1800年頃には今の福地神社の  
 地には早戸神社が鎮座していて、後、福地神社が北村から、白山神社が村前から移ってきたことがわかる。)  
 興専寺境内(現、田中博幸氏宅前付近一帯)九畝(890㎡)、専了寺境内一反四畝二十五歩1470㎡)共に村  
 除(年貢免除のこと)也。

新撰美濃志の「白石村」の箇所に、

『養老酒』は栗笠村の竹光堂という家にて製造<sup>つくり</sup> 諸<sup>しょ</sup> 方<sup>ほう</sup> にうる。瀧津瀬<sup>たきつせ</sup> と名づけて名産とす。其<sup>そのせい</sup> 精<sup>あつく</sup> 厚<sup>かんみ</sup> 甘<sup>あま</sup> 味<sup>あじ</sup>  
 他に比するものなし。よりて価も亦<sup>また</sup> 貴<sup>たか</sup> し。高田の町にて作れるをも亦<sup>また</sup> 養老酒という(意味：「養老酒」は栗笠  
 村の竹光堂が製造し、いろいろな地方に売っている。瀧津瀬と命名して名産品としている。その品質は非常に  
 良く甘さは他とは比べられない。そのため価格も高い。高田の町でも、また「養老酒」と名付けて製造販売してい  
 る。)

と記している。

文化7年(1810)文人墨客<sup>ぼっかく</sup> (書や画などに親しむ人、書家や画家のこと)が佐藤与三郎邸<sup>てい</sup> に集って栗笠八景<sup>はっけい</sup> を定  
 め、漢詩や和歌をつくっている。

『栗笠八景』

栗笠湊船 養老山花 一本松月 牧田川蚩  
 多芸野雪 中道旅人 鎌倉堤雨 明神夜灯

栗笠・船附・烏江の三湊は、経済上の要地として徳川幕府は横<sup>よこ</sup> 曾<sup>そね</sup> 根<sup>ね</sup> 湊<sup>みなと</sup> と共に直<sup>ちよつかつ</sup> 轄<sup>かつかつ</sup> 地とし、下笠に陣屋を構えた代  
 官石原清左衛門に支配させた。元和5年(1619)尾<sup>び</sup> 州<sup>しゅう</sup> 領となり、その後、尾<sup>おわり</sup> 張<sup>はん</sup> 藩<sup>はん</sup> 村<sup>むら</sup> 家<sup>け</sup> 老<sup>ら</sup> 竹<sup>たけ</sup> 腰<sup>のこし</sup> 氏<sup>し</sup> の所<sup>しりょう</sup> 領となっ  
 て明治維新に至った。栗笠村高977石5斗5升4合。廃<sup>はい</sup> 藩<sup>はん</sup> 置<sup>ち</sup> 県<sup>けん</sup> 後<sup>ご</sup> 今<sup>いま</sup> 尾<sup>お</sup> 県<sup>けん</sup> となる(笠郷地区の上之郷村は笠松県、  
 他の4村は今尾県)。栗笠獅子舞は岐阜県無形文化財に指定されている。

明治以降の笠郷地区沿革

明治元年 村名	幕末 領主名	旧県名	明治元年 石高	沿 革			
大野村	今尾藩	今尾県	179	大野村	船着村 栗笠村 2.71 合併	笠郷村 明治 30.4.2 合併	養老町 昭和 29.11.3 合併
船附村	今尾藩	今尾県	198	船附村			
下笠村	今尾藩	今尾県	1816	下笠村			
上之郷村	幕僚大垣預	笠松県	616	上之郷村			

(参考:一石は約米150kg)

2. 濃州三湊

江戸時代、牧田川沿いに発展していた烏江・栗笠・舟付の三つの川港を、濃州三湊と呼ぶ。三湊は、舟で牧田川・伊尾川(現、揖斐川)を通して桑名や名古屋、さらに遠く江戸と結び合い、また陸上では九里半街道によって、琵琶湖の朝妻湊(現、滋賀県米原町)、米原湊(現、JR 米原駅付近)と結ばれていたもので、京都方面や北陸方面との交通も便利であった。このように、東日本と西日本、太平洋方面と日本海方面との間の輸送に一番便利で、賃金も安かったので、諸方から荷物が行き合った。

主な荷物は、

- ・上り荷(京都・北陸方面へ送る荷物)  
木曾の木材、加茂郡・武儀郡の茶、伊勢の塩、常滑(愛知県知多半島)の陶器など
- ・下り荷(江戸・尾張・伊勢方面へ送る荷物)  
菜種油・多良村(現、上石津町)の木炭、大和(奈良県)の生綿、米などで年貢米の輸送も多かった。又、二代将軍秀忠の時には、近江(滋賀県)の国友村の鉄砲鍛冶の製造した大砲が、たびたび駿府(静岡)へ送られた。

三湊が盛んになったのは戦国時代末期からで、江戸時代末期・明治時代に衰退した。

(1) 烏江湊

烏江湊の船問屋は吹原家であった。船問屋というのは、船を持っていて、旅客や荷物を送る仕事をしている職業をいう。吹原家は、豊臣秀吉が方広寺・聚楽第・伏見城を築いた時、その木材を木曾から京都へ輸送したといわれ、又元和七年(1621)に京都二条城へ檜皮(ヒノキの表皮)を送っている。代々勘兵衛を名乗り繁栄した。



(2) 栗笠湊

栗笠湊の船問屋は佐藤次郎衛門家が勤めた。分家数軒があって皆繁栄した。問屋を開業した五郎右衛門は、徳川家康が一五七〇年(元亀元年)近江から引き上げて来た時、五郎右衛門の家に泊った時、家康を太田村まで舟で送ったことがあった。栗笠の町通りには、今も昔の面影が残っている。

(3) 舟付湊

舟付湊はずっと古くから開かれていたようで、舟付という名からも、なかなか良い湊であったことが想像される。舟問屋は安田家が勤めた。舟付湊には、尾張領のたくさんの湊の中で十か所だけに建てられた「浦高札」が建てられた。浦高札というのは、荷物の取り扱や運賃のこと、船が沈むようなことがあったらお客を助けること、荷物を拾いあげることなど、いろいろ湊のきまりを板に書いて建て、皆にしらせた建て札のことである。



高札の例

(4)衰えていく三湊

三湊はずいぶん繁栄したが、次の4項目の原因により、次第に衰えていき明治の初めにはすっかり減びてしまった。

①大垣船町湊の発展

繁栄していた三湊にとって船町湊という恐ろしい競争相手が現れた。元和六年(1620)に大垣藩は、杭瀬川と水門川との間に運河を築き、新しく船町湊をつくった。水門川は大垣から始まり、伊尾川にそそぐ運河で伊尾川への合流点に横皆根湊があり、舟付湊の向岸にあたる。水門川は水もたくさんあり、流れもゆるやかであるので舟運が非常に便利であった。その上、船町湊は美濃路に沿っているし、中山道へもつながりやすいので、三湊へ廻っていた荷物は、だんだん船町湊へ廻されるようになった。それで三湊の間屋たちは、領主の尾張藩へ願い出て、木曾川・長良川の各湊へ、

「上り荷物やいかだは必ず三湊へ着けるようにし、船町湊へは着けないよう」

に命令を出してもらった。それから百年ばかりは大したこともなく過ぎたが、船町湊は発展するばかりで三湊へ来ていた荷物はどんどん船町湊へ廻っていた。尾張藩は、享保二〇年(1735)、元文四年(1739)に同じような命令を出したが、三湊から九里半街道を陸路で中山道に荷物を送るのは、船町湊から送るのと比べると非常に不便で運賃も高く、日数も多くかかったので、なかなかこの命令は守られなかった。

三湊からは、このままでは三湊はつぶれてしまうと、必死に尾張藩へ何度も保護を願い出たが、尾張藩の力でもどうにもならず、江戸時代中頃からは三湊は大垣藩の船町湊のために押しつぶされかけた。

②造船技術が発達した

大きな船を造ることができるようになったので、江戸と大坂との間を直接荷物を送ってしまうようになり三湊を通る荷物がすっかり減ってしまいました。

③牧田川が浅くなってしまった

牧田川は、川上から流れ出る土砂のため、年々浅くなっていた。そのため舟の通行が不便となり、舟船のような大きな舟は、三湊まで上ってくることができなくなった。それで、太田村(現、南濃町)付近まで舟船で上ってきて、ここで荷物を何艘もの瀬取舟に積みかえ、舟船はほんの少しだけの荷を積んで三湊へ上った。こんなことをしているだけでそれだけ運賃も高く、荷の着くのも遅くなり、三湊を利用するものは当然減っていった。

次の表は、烏江漢の持舟の変化を示したもので、年がたつにつれて牧田川が浅くなって、大きい舟が減って小さい舟に代わっていく様子がよくわかる。

④尾張藩の保護がなくなった

明治維新となって尾張藩の庇護がなくなったので、三湊はすっかり減んでしまった。明治維新で湊としての機能は亡びたが、昭和の初期までは中鵜飼船が二、三艘位は停泊しており、堤防の上には倉庫が建並び、大神宮の灯明には灯かりが点き湊としての面影が残っていた。昭和二五年(一九五〇)牧田川と杭瀬川の分流工事が行われてからはその面影もなくなった。

(のびゆく養老)

烏江湊持船の変遷

年代	寛文2 1662	享保12 1728	宝暦10 1760	文化7 1810	文政8 1825	天保5 1834	天保8 1837	弘化3 1846	明治5 1872
平田(艀)船	7	5	6	5	5	5	2	2	
瀬取船		2	2						
小乗船	2								
大鵜飼船							6	6	5
中鵜飼船				1	1	2	2	2	9
小鵜飼船				6	6	8	8	9	
四ッ乗船						6	6	6	4

平田船 ----- 50~130石入  
中鵜飼船 ----- 40石入

大鵜飼船 ----- 50石入  
小鵜飼船 ---- 20~25石入

かんぶん  
寛文2年(1662)三湊船数

船種 村名	平田(艀)船								四 ッ 乗 船	瀬 取 船	箸 箱 船	渡 船	総計
	130石	90~ 100石	80~ 90石	70~ 80石	60~ 70石	50~ 60石	船数計	石数計					
烏江		1	3	3			7	575	2				9
栗笠			4	2			6	490	1			2	9
舟付	1	1	1	9	2		14	1115		3			17
海松			2				2	170			2		4
柿内			1				1	85			1		2
大牧						1	1	55					1
今尾							0	0	3				3

(注)寛文元年「御拝借金仕船造申万跡留帳」(吹原氏所蔵)より

### 3. 船問屋(ふなどいや/ふなどんや) 佐藤家

栗笠湊の船問屋として三百余年間栄えた佐藤家は藤原不比等の<sup>こうえい</sup>後裔で家紋は源氏<sup>げんじぐるま</sup>車、美濃国<sup>こうずち</sup>上有知(現、美濃市)の城主であった。佐藤<sup>しょうげんちかよし</sup>将監<sup>しづきん</sup>親義は志津山(南濃町志津)を居城<sup>きよじょう</sup>としていたが永禄7年(1564)織田信長<sup>えいろく</sup>の先陣<sup>せんじん</sup>尾張国<sup>かにえ</sup>蟹江城<sup>たきがわかず/いちます</sup>主<sup>こうりやく</sup>瀧川<sup>えん</sup>一益の為に攻<sup>いづみまち</sup>略<sup>まる</sup>され、縁を求めて大塚(大墳)城主(養老町<sup>いづみまち</sup>泉町)丸もひょうごのかみ<sup>きしよく</sup>毛兵庫頭<sup>てんしょう</sup>に寄食していたが後、栗笠に移住した。天正14年(1586)8月晦日卒した。法名<sup>みそかしゅつ</sup>覺林院<sup>ほうみやうかくりんいんでん</sup>殿<sup>うんあんそうかんだいこじ</sup>雲庵宗関<sup>ほうむ</sup>大居士、大塚村の妙徳院(現在の三神町、寺は廃寺となっている)、に葬<sup>なんのう</sup>った。志津(南濃町)の善<sup>ぜん</sup>教<sup>きょう</sup>寺に墓碑(二百年祭天明五年(1786)建立)がある。

親成<sup>ちかしげ</sup>は将監の子である。五郎右衛門と名乗った。元亀元年(1570)織田信長<sup>えちぜん</sup>が越前<sup>よしかげ</sup>の朝倉義景<sup>せいぼつ</sup>を征伐した時、浅井長政<sup>あざいながまさ</sup>により後を絶たれそうになり急遽<sup>きゅうきよ</sup>引きあげた、いわゆる「金ヶ崎の戦い」において、信長の支援<sup>かねがさき</sup>に出陣<sup>しゅつじん</sup>していた徳川家康も漸く脱出<sup>ようや だっしゅつ</sup>したとされる。その時、徳川家康は五僧<sup>ごそう</sup>・保月<sup>ほうづき</sup>の間道<sup>かんどう</sup>(彦根~多良・時間の山道)を経て時・多良を通して大塚村妙徳院に入り、さらに栗笠に来て佐藤五郎右衛門の家に宿った。五郎右衛門は高田湊の西脇三郎左衛門と力をあわせて夜中に船を出し家康を太田村(南濃町)まで無事送った。この功により松風<sup>さま/ちやうす めしかご たまわ</sup>という茶磨<sup>さま</sup>と飯籠<sup>めしかご</sup>を賜っている。慶長10年(1605)死亡、妙徳院に葬られた。栗笠湊の佐藤五郎右衛門と高田湊の西脇三郎左衛門は、慶長15年高須城主徳永<sup>とくながながまさ</sup>寿昌から湊の開発に功があったというので、特に持船2艘を持つことを許され、そのうち1艘は番船の取扱いを受けず随時船積みをしてよいという特権を与えられた。

親則<sup>ちかのり</sup>は親成の子であるが五郎右衛門を襲名した。高田湊の西脇三郎左衛門は故<sup>ゆえ</sup>あって罪により家督相続できず断絶したため西脇家の船株は佐藤家が受継ぐことになった。親重<sup>ちかしげ</sup>は親則の弟で三四郎と名乗った。親則の死後、後継者の孫左衛門はまだ幼少であったので三四郎親重が問屋を継ぐこととなった。その後、孫左衛門が成人してからも問屋株はもとにもどされることなく親重の子孫が相続することとなった。親重は明暦2年(1656)死亡し、大塚村の<sup>しょうふく</sup>莊福寺に葬られた。これ以降莊福寺は佐藤家の菩提<sup>ぼだいじ</sup>寺として代々の墓が多数現存する。莊福寺は鎌倉時代の初めに創建された名刹<sup>めいさつ ゆいしよ</sup>(由緒ある寺)である。昭和8年牧田川改修工事の時、三神町から高田の現在地へ移転した。

佐藤家は次第に繁栄して多くの分家があったが、いづれも<sup>かしらびやくしやう</sup>頭百姓<sup>かしらびやくしやう</sup>や庄屋をつとめていた。文化12年(1815)の村絵図(専了寺所蔵)によれば、材木屋佐藤文四郎、佐藤万三郎、佐藤宇内、酒屋丈右衛門、佐藤与三郎、紺屋<sup>こうや</sup>佐藤三郎次、問屋次郎左衛門等佐藤一族が、いづれも大きな家<sup>いえがまえ</sup>構<sup>はんえい</sup>でその繁栄の様<sup>さま</sup>がうかがわれる。佐藤一族は皆苗字帯刀を許され、本家の船問屋佐藤次郎左衛門家は問屋の経営がしばしば窮地におちいったこともあったが、分家の与三郎家が最も栄えた。しかし、栗笠湊の衰微と共に衰え、「与三郎」家は大垣藩主戸田家の数度にわたる調達金に応ずるなどしたが、天保一三年(1842)与三郎<sup>てんぼう</sup>道衡<sup>みちひら</sup>の時、連年の凶作のため負債が多く、遂に安八・多芸両郡にわたる土地を売却するにいたった。最後まで分家の「与三郎」家は残った。

この湊の<sup>すいたい</sup>衰退<sup>だげき</sup>は、佐藤家にも大きな打撃であったことは間違いなく、家業の<sup>すいたい</sup>衰退<sup>そんぼう</sup>はまさに家の存亡に関わるものであった。明治維新を迎えた際の当主は、<sup>みつあき</sup>光昌<sup>みつあき</sup>であるが、彼は明治一三年(1880)に死去している。その後を、稀造<sup>きぞう</sup>が引き継ぐことになり、彼は明治の初めに波米し、東京への進出も図ったようであるが、湊問屋に変わる家業を興<sup>おこ</sup>すことができず、明治三九年(1906)に死去する。彼の<sup>そうせき</sup>子供達は僧籍<sup>そうせき</sup>に入ったもの、<sup>そうせい</sup>早世<sup>そうせい</sup>(若くして死ぬこと)した者などさまざまであり、佐藤家を継ぎ再興<sup>つ きいこう</sup>を図る人物はついにいなかった。今日<sup>こんにち</sup>栗笠の地には、佐藤家の<sup>ちすじ</sup>血筋<sup>ちすじ</sup>を引く人物はまったく居住していない。さらには「佐藤」を名のる家は<sup>すで</sup>既<sup>すで</sup>になく、本家・分家ともにすべて離散<sup>りさん</sup>してしまっている。

現在、養老の地に唯一<sup>ゆいつ</sup>残る佐藤家の<sup>こんせき</sup>痕跡<sup>こんせき</sup>は、栗笠に程近い場所に位置する<sup>しょうふく</sup>莊福寺<sup>ぼち</sup>の墓地にある代々の墓石のみである。この莊福寺は家康を助けた親成の孫にあたる親重が明暦2年(1656)に葬られたことから、佐藤家の<sup>ぼだい</sup>菩提<sup>ぼだい</sup>寺(その寺の門徒になり、先祖代々の墓をおき、葬式や法事を行う寺)となった。この莊福寺自体が現在無住のため、佐藤家の過去帳の有無などを確かめることはできない。現在残されている<sup>ぼひめい</sup>墓碑銘<sup>ぼひめい</sup>を見る限り、稀造の父母にあたる墓石が、やや荒れた墓地の一角に確認できるのみである。

佐藤家が「佐藤 将 監 親 義」を初代として意識していたことの証拠として、「光 敬」が書き残した『志津之郷 大 塚ノ郷及佐藤氏ノ 畧 記』に、「親義」の二百年 遠 忌に善教寺に供養 塔を建立したことが記されている。この石碑は、現在も海津市南濃町志津にある善教寺 境 内に現 存している。石碑の正面には「覺 林院 殿 雲 庵 宗 閑 大居士」という 親 義の 戒 名 が刻まれており、右側面には「天 正 十四年 丙 戊 秋八月 晦 日」という親義の没年が記してある。天正十四年(1586)は、光敬が「畧 記」を記した天明五年(1785)からちょうど200年前であり、この石碑は光敬が建立したものに間違いないと判断できる。

そして「親義」の三百五十年 遠 忌にあたる昭和10年(1935)には、佐藤家一族が石碑の前で撮影した写真がある。この写真には、善教寺の先代住職の顔を認めることができる。すなわちこの時点までは、佐藤家はどうか 命 脈 を保っているといえる。しかしながらこの後、第2次世界大戦とその後の混乱期を経て、更には長兄が昭和二十年代に死亡するに至って佐藤家は完全に 衰 退 し、この石碑についても 忘 却 されたものと考えられる。

福地神社には佐藤家が寄進したと思われる木製・陶製の 狛 犬 や、明和元年(1764)の石灯 籠 2基がある。





#### 4. 九里半街道(くりはん かいどう)

三湊から牧田・関ヶ原を経て、今須・柏原・醒井・番場・米原に至る通路が、今津と小浜を結ぶ通路と行程も九里半(38km)で同じであるところから、見習って九里半街道(九里半廻り)と呼ばれ、戦国時代末期から江戸時代末期まで、極めて重要な商品流通路であった。なお、三湊と牧田間、とりわけ三湊と高田町とを結ぶ道について、濃州(濃州)の行記は「鳥江湊より牧田へ至るには、牧田川の堤上を高田町のうちへかかり、それより五日市場、乙坂村・沢田村を経て牧田川に至る。又船付・栗笠湊よりは金草川の南堤をゆき、西岩道・口ヶ島村北を通り高田町へ出る也」と記している。このうちの船付・栗笠と高田町間の街道が、文化12年(1815)の洪水によってたち切られ、三湊に上り下りする諸荷物の通行が閉ざされたりしたことがあった。

主な荷物は、

・上り荷(京都・北陸方面へ送る荷物)

品目	備考
木曾の檜等の木材	関西の神社・仏閣等
加茂郡・武儀郡の茶	北陸から東北地方の裏日本地方を販路として
伊勢・尾張の塩	内陸地方を販路
常滑(愛知県知多半島)の陶器	
麻・梨・芋皮(繊維原料)	信州(長野)・上州(群馬)から
切り干し・紙類・荏油(えごま油)	尾張、濃州(美濃)から
サンマ・鯛・荒布(アラメ)・若布(ワカメ)	勢州(伊勢)から
年貢米輸送	上方(関西)へ

・下り荷(江戸・尾張・伊勢方面へ送る荷物)

品目	備考
畳表類・木綿類・鯉節・竹皮・多葉粉・糸総(総糸)・藍・小間物・生綿・菜種油	上方(関西)から
打ち刃物・奉書紙・笠類・刻昆布	北陸から
多良村(現、上石津町)の木炭	養老山地から
近江(滋賀県)の国友村の鉄砲鍛冶の製造した大砲(秀忠時代)	駿府(静岡)へ

この九里半街道を上り下りする諸荷物をめぐって宿場間の対立がおきた。慶長11年(1606)関ヶ原宿問屋と今須・柏原両宿の問屋が、上り荷物をめぐって争論を起したのがそれである。原因は関ヶ原から北国街道(北国脇往還)の玉へ荷物を通したため、今須・柏原への荷物が減少したということにあった。このとき、幕府は、越前や長浜方面へ送られる荷物は北国街道(玉経由)を通し、京都方面へ送られる荷物は中山道(今須・柏原経由)を通すように裁定した。

その後中山道が整備されるにともない、上り荷物は関ヶ原宿で、下り荷物は今須宿で継立て(馬等を替えて運送すること)るように定められた。しかし、慶長十六年(1611)には牧田宿が関ヶ原宿へ荷物を着けずに、旧道である平井道を経て今須宿へ荷物を付け通してしまったということで、関ヶ原宿と牧田宿が争うことになった。この牧田から今須まで通る平井道というのは、牧田・関ヶ原間の道に比して距離も近く、平坦な道であるため運送も楽であり、駄賃(馬荷で運ぶ費用)も安価であった。それだけに上り荷物を運ぶ牧田宿にとっては、関ヶ原への道よりも、平井道を運ぶ方が好都合であった。ここに目を付けたのが今須宿である。つまり当時の下り荷物は上り荷物にくらべて極めて少なく、上り荷物の百分の一にも満たなかった。その下り荷物の継立に限定された今須宿は、牧田宿に働きかけ、三湊や伊勢路を経て駄送(馬荷運送)される上り荷物を関ヶ原宿へ回さずに今須宿へ運ばせたのである。争論に及び、今須宿はその代償として琵琶湖舟運による下り荷物を関ヶ原宿で継立てるようになることを申し出た。関ヶ原宿にとってこのような取引に応じ

られるはずはなかったが、支配者の圧力が大きいのしかかり、妥協を余儀なくさせられた。今須宿は代官頭であり美濃国奉行の<sup>おおくぼいわみのかみながやす</sup>大久保石見守<sup>さまのすけ かんかつ</sup>長安の代官所で、鈴木左馬助<sup>はた</sup>の管轄下にあったのである。それに対し関ヶ原宿は旗本<sup>もと</sup>竹中丹後守<sup>たんごのかみしげかど</sup>重門の領地であった。そこで取り決められたことは次のようであった。

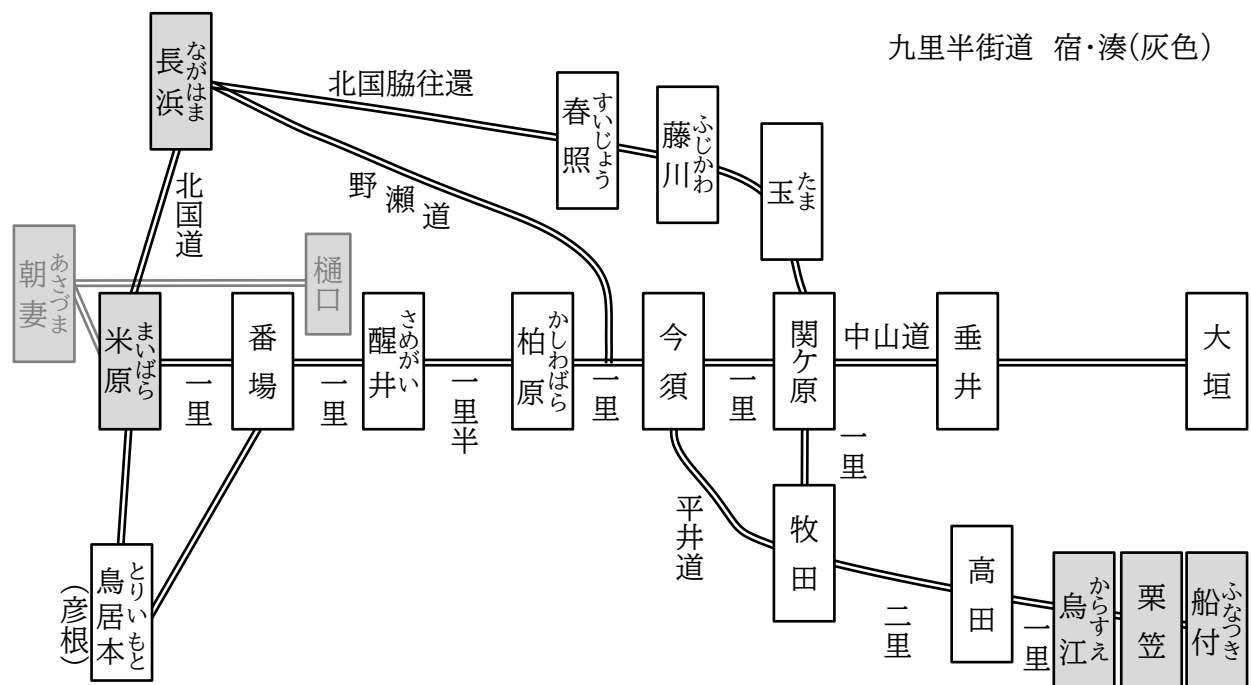
上り荷物は、本街道の大垣・赤坂両宿より関ヶ原宿へ、関ヶ原宿より柏原宿へ継立てる。それに対して三湊で荷揚げされ牧田宿を経てくる荷物や、三湊を通過し、杭瀬川筋の野口村や大谷川筋の長松で荷揚げされる諸荷物については、関ヶ原宿を通過して今須宿で継立てる。また、下り荷物は、<sup>ばんばのしゆく</sup>番場宿から今須宿へ、今須を通過して垂井宿で継立てるが、脇道の北国道(北国街道は明治以降の名称)や琵琶湖舟運によって運ばれてくる下り荷物は関ヶ原宿で継立てることとなった。

この取り決めを見ると、平井道を<sup>つづ</sup>潰そうとした関ヶ原宿の願いが受け入れられたかにみえるが、上り荷物の一部継立てを認められた今須宿の方が有利な条件を<sup>かくとく</sup>獲得したようである。しかし、その後も<sup>ふんそう</sup>紛争は続いていった。

この争論をみてみると、上り荷物が圧倒的に多く、下り荷物が少なかったこと。上り荷物には牧田宿へ送られた三湊からの船揚荷物があり、その荷物がかなりの量に達して、継立てをめぐる<sup>そうだつ</sup>争奪の対象となっていたことを確認することができる。三湊－牧田宿の通路が近世初頭から重要なものとなっていたことが知られる。

<sup>あさづまみなど</sup>朝妻湊は、天野川の河口に築かれた湊で、近隣の<sup>ちくまこがん</sup>筑摩湖岸には朝廷などへの貢物を送るため、調理・加工場を有した集荷場である<sup>つくまのみくりや</sup>筑摩御厨があったとされる。天野川の舟運も利用され、古くから<sup>ようそう</sup>要湊として賑わいを見せた朝妻湊も、<sup>けいちよう</sup>慶長八年(1603)に彦根藩の保護の下、米原湊が開かれたことから次第に<sup>すいたい</sup>衰退していった。

米原湊は北村源十郎が彦根藩主、<sup>いい</sup>井伊氏の保護を受けて開いた湊で、当時<sup>ないこ</sup>内湖の奥に位置する湊で、彦根藩の御用船を<sup>けいりゆう</sup>係留する三湊(長浜、松原、米原)の一つとして重要視された。この港の<sup>かいそう</sup>開湊により、中世以来の要湊の朝妻湊の貨物が<sup>げきげん</sup>激減し、朝妻湊は<sup>さめがいじゆく</sup>醒井宿から貨物を廻そうとしたが失敗し、米原湊は発展する。(米原湊は現在のJR米原駅付近にあった。)



## 5. 福地神社

(住所)	栗笠26番地の1
(創建)	創建年代の記録は残されていない
(祭礼情報)	10月5日に近い日曜日を福地神社例大祭の「本楽」、前日が「試楽(新楽)」
(主祭神)	大物主命(おおものぬしのみこと)

① 「福地神社」に関して、創建年代の情報はない。旧名は「富士神社」と言われる。「福地神社」の記録は貞享4丁卯年(1687)夏の洪水の為に流失し、更に天明2年(1782)10月及び文化8年(1811)3月の再度の火災のために消失して、由緒は明らかでない。文禄4年(1595)の古書の記録に「福地大明神」の御社名が書かれているので、それ以前から栗笠地内に御鎮座されていたと考えられる。当社はもともと現在の場所より五～六町(545～654m)程南の北村という地に鎮座していたのを天明4年(1784)現在地に遷座されたと伝えられ、旧社地は大正13年まで残されていた。御神体はもともと阿弥陀如来の木像であったが、明治11年10月30日に直径3寸(9cm)の円鏡に変更すると同時に、祭神を大物主命に改めた(明治初期の神仏混交、廃仏毀釈(仏教文化の破壊活動)を回避するため)。境内は637坪の敷地があり、8社の神社を祀る。

② 境内社「隼人神社」の祭神は詳らかでないが火闌降命ともいう。福地神社をこの場所へ遷座する以前から鎮座され、この土地の昔からの神である。もともと隼人神社は(薩摩)隼人族の氏神であり、戦いを経る毎に全国に広まったと考えられる。(日本書紀の本文では、にぎのみこと このはなのさくやひめ 開耶姫の子は、誤解を解くため火中で生んだ三神おり、その第一子が火闌降命(=海幸彦)であり、隼人の祖である阿多君とされる。)

③ 境内社「白山神社」は白山大権現の御札の十一面観音像が御神体であったが、廃仏毀釈(仏教文化の破壊活動)を回避するため明治11年10月30日に直径1寸2分(36mm)の水晶玉に改めた。白山比咩神を祀り創建年代は不詳であるが、現在値より500m程西方に鎮座していたのを福地神社と同年代頃、現在地に遷座されている。当地方では特に歯の病を治してくださる神として崇め、お豆腐をお供えしてお参りする参拝者も多い。(江戸時代中期、後桜町天皇が歯痛で苦しんでいた際、白山神社(京都)が塩を天皇に献上し、持ち帰った神箸で神塩をつけたところ、たちまち歯痛は治ったという。そこから白山神社には「歯痛平癒」「医療安全」のご利益があると信仰を集めた。(現在の歯ブラシが箸で、歯磨き粉が塩に相当し、塩で歯を磨いて治ったということになる。)

④ 「金刀比羅神社」は大己貴神及び崇徳天皇を祀り、天保12年(1841)10月15日讃岐國金毘羅神社の御神符を受け創建された。この神は病氣平癒、海上交通安全の守護神として知られている。栗笠は江戸時代を中心として濃洲三湊の一つとしての栗笠湊が大いに繁盛した時期があり、川湊の守護にお祭りされたものと考えられる。明治初期の神仏混交、廃仏毀釈(仏教文化の破壊活動)を回避するため、明治初期に金毘羅神社から金刀比羅神社へ名称変更している。(全国にある金刀比羅神社と同様に、明治時代初め頃までは、金毘羅神社の名称で金比羅大権現を祀っていたと思われ、その名残がまだ散見される。香川県にある金刀比羅宮総本宮は、明治初年の神仏分離以前は金毘羅大権現の名称であり、金毘羅大権現から大物主神へと祭神を変えている。)

⑤ 「御鋏神社」は豊受姫命を祀り、神名の「ウケ」は食物のことで、食物・穀物を司る女神であることから農業の守護神とされる。由緒は不詳。

⑥ 「秋葉神社」は火之迦具土神を祀り文久2年(1862)3月17日創建。現在の静岡県浜松市遠州秋葉山「秋葉山本宮秋葉神社」の御神符を受け奉安している。火の幸を恵み、悪火を鎮め、諸厄諸病を祓い除く火防開運の神とされる。火災が続いたので防火守護神である秋葉神社を勧請したと思われる。

⑦ 「馬神神社」は祭神創建不詳。昔当地内ではたくさんの牛馬が飼われていたので、その守護神として、お祀りされた。ご神体は憤怒相をした三面座石仏像で神仏習合の影響ある神社である。(石仏像の頭上に馬頭は描かれていないが、馬頭観音像の一種と考えて良い。)

⑧ 「春繁稲荷神社」は春繁稲荷大神を祀る。京都の伏見稲荷より正一位春繁稲荷大神の御神符をお受けし、昭和28年(1953年)現在地に奉安し、御鎮座された。農業の神様であり、商工業の神様でもある。昔は稲荷講があり、年一回京都の伏見稲荷へ参拝していた。

寛文6年(1666)の棟札あり。

元禄8年(1695)の記録あり。

美濃明細記(茂々久岐根)に福土大明神領栗笠村ノ内北村94石7斗。速戸大明神領57石と記されている。

(各神社祭礼日)

春繁稲荷神社	白山神社	福地神社	隼人神社	秋葉神社	金刀比羅神社	御鋤神社	馬神神社
はるしげいなりおおかみ春繁稲荷大神の御神符	直径1寸2分の水晶玉	直径3寸の円鏡		「秋葉山本宮秋葉神社」のごしんぶ御神符	さぬきのくにこん讚岐國金ぴら毘羅神社の御神符		ふんぬそう 憤怒相をした三面座石仏像
春繁稲荷大神	白山比咩神	大物主命	火闌降命	火之迦具土神	大己貴神及び崇徳天皇	豊受姫命	馬頭観音像
旧暦の初午の日に近い土曜日又は日曜日	10月5日に近い日曜日:例大祭の本がく楽、(前日は試楽(新楽))			11月17日、夕刻	4月3日、夕刻	10月10日、夕刻	4月18日、夕刻
15カ所程に春繁稲荷の旗を揚げ、総代全員で般若心経を唱える	氏神様の福地神社、白山神社・隼人神社に家内安全・五穀豊饒・村内和合を祈願して、神事並びに獅子舞・祭踊り奉納する。			いずれの神社のお祭りも、お供物を供え、提灯を取り付けてローソクを灯し、小太鼓を打ち鳴らす。秋葉神社では、火の神を静めるためにたき火をする。			



側面に 村内安全  
裏面に 天保八年(1837)酉七月建築  
明治三十一年(1898)十一月改築

と記されている。

すが  
7.須賀神社

- (住所) 栗笠 堤塘無番地 (堤塘:堤防敷地(不動産用語))  
(創建) 創建年代の記録は残されていない  
(祭礼情報) 7月16日  
(主祭神) 素盞鳴之尊 (神仏混交による仏教では牛頭天王にあたる)

縁由・勸請年月等不詳。この神は邪霊・悪霊・疫病封除の神として、古くから村の入り口等に祀った。栗笠の東西の入り口を守るため、市神神社と同時代に創建されたと思われる。市神神社の祭神である神大市姫の配偶者の素盞鳴之尊を祀る須賀神社を西の入り口に勸請したのであろう。

神社の幟には「日本総社牛頭天王」と書かれている。牛頭天王は神仏習合による素盞鳴之尊の別名である。牛頭天王は印度(インド)の祇園精舎(インドにある修行寺院名である。釈迦が説法を行った場所であり、天竺(インドのこと)五精舎(5つの修行僧院)の1つ。)の守護神。京都八坂神社や津島の津島神社祭神である。

素盞鳴之尊(牛頭天王)を祭神とする津島神社が、嵯峨天皇より正一位の神階と日本総社の称号を贈られていることから、須賀神社の幟に日本総社の文字を入れたと思われる。

(参考)神仏習合(しんぶつしゅうごう)

神仏習合とは、日本古来の神社信仰と仏教信仰が融合し一つの信仰体系として再構成された宗教現象。神仏混淆ともいう。神道で祀られる神様が仏教の仏様に、反対に仏教の仏様が神様に置き換えられたり、同一視されたりする。

だいじんぐう  
○大神宮

- (住所) 栗笠 堤塘無番地  
(創建) 創建年代の記録は残されていない  
(祭礼情報) 7月16日  
(主祭神) あまてらすおおみかみ とようけひめのかみ  
天照大神、豊受姫命

縁由(神社の由来)・勸請年月等不詳。この神は東太神宮と同じで東西の入り口を守るために現在地に祀られ、商・工・農業、栗笠の守り神として栗笠の繁栄を見守ってきた。

## 8. 福地神社<sup>あと</sup>址

栗笠にある福地神社から南600mの位置に、福地神社御旧址と刻まれた石碑がある。現在の養老町栗笠は、元はこの石碑の位置にあり、後に北へ移動したと考えられている。このことについては、考古学からの成果もあり、この石碑付近でたくさんの中世遺物が採集され、13世紀にはこの辺りに村があったことが確認されている。ただ、この村の名が「くりがさ」であったかは明らかではない。この他、栗笠には福地の神社名から、この一帯を倭名類聚抄<sup>わみょうるいじゅしょう</sup>に記載された「富上郷<sup>ふかみのごう ひてい</sup>」に比定（類似対象と比較し推定すること）する説は大日本史も採用しているが、岐阜県の見解としては富上郷を岩道付近としている。



## 9. 貴船(鬼伏根)神社 址

栗笠団地の東北角のすぐ東に貴船神社址の標柱が立っている。福地神社には栗笠内の各地にあった神社が合祀されているが、貴船郷にあったくらおかみのかみ闇きふね竈神を祭神に戴く貴船神社だけは合祀されなかった。その経緯に関する詳しいことは伝わっていない。

(専了寺古地図では「貴船」ではなく「鬼伏根」(鬼は点がない、江戸時代以前の古字である)と書かれている。江戸時代以前の漢字の使い方は当て字を使用する場合があります、)

## 10. 白山神社址

現在の福地神社から西南方向約500mの田んぼの中に、<sup>はくさんだいごんげんあと</sup>白山大権現址の標柱が立っている。「<sup>のうしゅうじゆんこうき</sup>濃州殉行記」は寛政年間(1789~1800)にできた本であるが、この本には栗笠村の神社の経緯を次のように記している。

一、<sup>だいまようじんけいだい たん せ</sup>早戸大明神境内一反二畝(約1190m<sup>2</sup>)<sup>ちんぎ</sup>村除(年貢免除のこと)也、此社は村内入口左の方にあり、宮づくりよし、福地大明神境内一反五畝七歩(約1500m<sup>2</sup>)(その址に標柱が建っている。)、白山権現社一畝十歩(約132m<sup>2</sup>)(その址に標柱が建っている。)共に村除也、村の南にあり。(この記述によって二百年程前には今の福地神社の場所には<sup>ちんぎ</sup>隼人神社が鎮座して、後、福地神社が北村から、白山神社が村前から遷移してきたことがわかる。)

興専寺境内(現在の栗笠町通り西端南側にあった。(田中博幸氏宅前付近一帯が敷地であった))九畝(890m<sup>2</sup>)、専了寺境内一反四畝二十五歩(1470m<sup>2</sup>)共に<sup>むらよけ そぜい めんじよ</sup>村除(租税を免除されていること)也。

だいごさんせんりょう  
11. 醍醐山 専了寺

(住所) 栗笠 178  
(創建) そうけん 創建治承元年(1177)天台宗  
ぶんめい 文明17年(1485)真宗に改宗  
けいちょう 慶長10年(1605)勢至から栗笠に移転  
(宗派) しゅうは 真宗大谷派(浄土真宗大谷派は通称)  
(本山) 東本願寺  
(本尊) ほんぞん 阿彌陀如来像  
(報恩講) ほうおんこう 11月3日～11月5日

じしやう うんけい そうけん  
天台宗で治承元年(1177)「雲慶」が創建している。当寺記録に、

「雲慶法印(僧位の最上位の略称)は人王七十五代崇徳院の御宇(君主が天下を治めている期間:1119-1164)保延五年(1139)八月二十三日出生。俗姓は中山中納言顯時卿の孫中宮大進(中宮職の官職)治部太輔(治部省の次官職)行隆第六男行統是なり。父行隆終焉の時行統に命じて曰く、汝壯年に及びなば出家得度(出家して僧になる儀式)して、菩提に趣け(仏の悟りの境地を志す)とて息絶え畢ぬ(死ぬ)。行統悲歎の餘忽ち(すぐに)髪を切り、山門明雲僧正の門に入り、師弟の約を爲し雲慶と改名す。治承元年(1177)七月十五日母を失ひ、坂本(大津市坂本)に草庵を結び、醍醐山壽量院と號す。北越(主に新潟県)柏崎の人、圓義坂本に來り、雲慶の弟子となり其後をつぎ、承久三年(1221)六月歿す。道羌、玄妙、藝空を経て靈鑑に至る。靈鑑は濃州大門郷勢至の人に姓を玉井と稱す。相師曰く劍難の相ありと、是に於て落髮して夢窓國師の弟子に携り、幾程もなく天台宗に改宗して藝空の草庵に入り、應永九年(1402)十月六日歿す。尊眞靈鑑の法子(仏門の教えを習い習得した者)となる。尊眞は遠州(静岡県西部)刺史(国守のこと)海老名駿河守の嫡子、故ありて出家し、江州(滋賀県)志賀(琵琶湖南西沿岸地域)の草庵にありしが、文明六年(1474)靈夢(神仏のお告げの夢)により、勢至村貴船郷に足利尊氏將軍掛城跡ノ森六町四段(反)餘(約63400m<sup>2</sup>)構此地拜領して彼志賀ノ幽廬(滋賀県志賀の草庵)を引移す。文明十七年(1485)三月蓮如上人の教化に歸依(教えに深く信仰する)し、本願寺に改宗、斯くて中山氏の孕婦(妊婦)をたまはり歸國す。同秋八月下旬男子出産す。俗名ががく/がらく、がんとく、しょう、そのご、そうぞく、ほうとう、うんぬん、雅樂、法名翫徳と稱す。其後相續法燈をかげ(仏の教えを広める)今日に及び云々」

と書かれている。勢至村へは文明六年(1474)に志賀から來たとある。文明一七年(1485)真宗に改宗している。勢至村に在って勢至千軒寺三ヶ寺といわれた三ヶ寺の一つまでに有力になっている。勢至には鉄座(鉄製品の製造、加工、販売の独占権を持った組合)があり一時期栄えたが、戦国時代も終わる千六百年頃に鉄の入手が困難になると同時に衰退している。勢至の衰退に伴うと同時に、勢至一帯が焼き討ちに遭ったこともあり、専了寺は慶長十年(1605)栗笠に移転した。

てんしょう じんごとし  
専了寺がまだ勢至にあった頃、天正十壬午歳(1582)二月、織田信長に勢至一帯が焼き討ちに遭ったことが記されている。(本能寺の変4ヵ月前)

ごほんぞん うらがき たぎ きふね だいご じゅりやういん  
御本尊の裏書は「文明十七年(1485)三月二十八日美濃国多藝郡妃婦寝郷味足村醍醐山壽量院願主釋尊信」と書かれている。

しんらんしょうにん ごしんえい えいろく のうしゅうたぎ きふね  
親 鸞 聖 人の御真影裏書は「永禄六年(1563)十月五日濃州當耆郡姫船郷栗笠村」となっている。なお  
慶長四年(1599)のいっせきごりん一石五輪がある。

この2つの文書は、栗笠へ移転(1605)する前の勢至時代の物であり、それまでの住所はたぎ當耆郡勢至村貴船郷である。

しょうめい のうしゅうたぎ むら げんじゅうしゃもん そうりよ きょうじゆん きょうほう  
鐘 銘には「濃州多藝郡北村之郷栗笠邑専了寺現住沙門(僧侶のこと)教順享保四年(1719)  
三月にじゅうはち廿八日」と書かれている。

(注)一石五輪：1つの石で作った5段の塔。方形の地輪、円形の水輪、三角の火輪、半月型の風輪、団形の空輪からなり、仏教で言う地ち水すい火か風ふう空くうの「ごだい五大(この世を構成している5要素)」を表す。石造では、下から、地輪は方形(六面体、立方体)、水輪は球形、火輪はほうぎょう宝形屋根型(四角錐形)、風輪は半球形、空輪はほうじゆ宝珠型(球状で先が尖っている)によって表される)

とうぐんざんこうせん  
12. 東郡山興專寺

(住所)	栗笠74
(創建)	火災のため創建年代の記録はない ぶんめい 文 明 十六年(1484)天台宗から真宗に改宗 だいえい (大 永 三年(1523)三月に真宗に改宗したとも伝わる)
(宗派)	真宗大谷派(浄土真宗大谷派は通称)
(本山)	東本願寺
(本尊)	阿弥陀如来像
(報恩講)	11月21日～11月23日

火災の為、記録焼失し創建年代等 <sup>つまび</sup> 詳らかでない。

もと天台宗(最澄 比叡山延暦寺)であったが文明十六年(1484)に真宗に改宗している。<sup>ぶんめい</sup> 文 明 十六年(1484)西了という僧が本願寺第八世 <sup>れんによしょうにん</sup> 蓮 如 上 人 に帰依(仏教に、煩惱から守るための教えを乞い、その教えに従って生きること)して、大永三年(1523)三月に真宗に改宗したとも伝わる。また、蓮如の登場まで、(本山である)本願寺は天台宗の末寺であった。

<sup>のうしゅうじゆんこうき</sup> 「濃 州 徇 行 記」は寛政年間(1789～1800)にできた本であるが、この本には興專寺を次のように記している。

興專寺境内(現在田中忠男氏宅前付近一帯)九畝(890m<sup>2</sup>)、専了寺境内一反四畝二十五歩(1470m<sup>2</sup>)共に <sup>そぜい めんじよ</sup> 村除(租 税 を 免 除 されていること)也。

### 13. 観音堂(かんのんどう)

栗笠の観音堂は養老町栗笠にある<sup>いちがみ</sup>市神神社付近にある、<sup>そうけん</sup>創建年代不<sup>ふしよう</sup>詳のお堂である。そこには「おもかるさん」と呼ばれる一体の石仏と、「西国三十三ヶ所」に由<sup>ゆえん</sup>縁のある三十三体の石仏が安置されている。これらの石仏は、もともと栗笠<sup>みなと</sup>湊の近くに並んでおり、<sup>りようし</sup>漁師や<sup>せんどう</sup>船頭さん達の信仰の対象だった。しかし、湊が<sup>すいたい</sup>衰退してしまったため、現在の位置にお堂を造り、安置することになった。そして、ここに安置されている「おもかるさん」を、願いを念じながら持ち上げ、軽く持ち上げれば願いが<sup>かな</sup>叶い、重く持ち上げなければ叶わない、という言い伝えが残っている。地元の方の話では、伊勢湾台風の行方不明者を捜す時に、「おもかるさん」にお願いしたところ、<sup>ごりやく</sup>御利益があり発見することができた。<sup>むらつじ</sup>村辻にある地蔵のような存在で外から入ってくる<sup>ふじよう</sup>不浄から村を守る役割をしている。栗笠にはもう一体、大悲観世音菩薩堂(須賀神社から50m程東方)にも「おもかるさん」とよばれる石仏がある。(タギゾウ)

だいひかんぜおんぼさつどう  
14. 大悲観世音菩薩堂

栗笠の町通り西端から約50m 東の南側に、「おもかるさん」とよばれる石仏と大悲観世音菩薩像がある。詳細不明。

## 15. 栗笠の地蔵盆

栗笠の元三昧(火葬場、埋葬場)の所に六地蔵があり、毎年8月24日に地蔵盆を行っている。あまり子どもたちは来ないが、紅提灯を吊るし、子どもたちにはお菓子を配る。栗笠には興専寺と専了寺の二箇寺があるため、それぞれ1年交代で住職に経をあげてもらう。2020年は専了寺住職が勤めをした。

地蔵は栗笠の老人クラブ(寿会)が世話をしており、地蔵さんの前掛けなどは栗笠の寿会の女性が手縫いで新調している。

以前は、三昧と六地蔵は300mほど西にあったものを現在地に移動させた。

昔は地蔵盆に子供が大勢集まり、提灯の数も多く、夜まで半日かけて地蔵盆を行ったが(昭和初期)、現在は準備と法要、後片付けを含めて1時間程度で終了する。片付けの後は集会所にて茶話会を行う。



16. 勉旃義校

明治六年(1873)下笠村に立心第一学校、大野村に立心第三学校、栗笠村に勉旃義校、船附村に修文義校が創立せられた。明治政府はこの頃全国で学校制度を始めており、資金的に余裕はなかった。そのため学校建設資金は地域からの寄付金によることが多く、義校の義は寄付を意味し愛知県、岐阜県で多く存在した。勉旃義校は初め栗笠村の一民家を校舎とし、校下は栗笠村・烏江村で、戸数238戸・人口1085人であった。明治十年、烏江に明倫義校が創設されると校下は栗笠だけとなった。

就学者数64人(男43人・女21人)・不就学者数67人(男30人・女37人)で、年間予算額は135円73銭2厘であった。職員は宮戸皆遵・日比野太郎の2人で、学校取締主者佐藤興三郎、監事佐藤茂一、会計大橋新七氏、であった。明治19年11月栗笠簡易小学校と改称した。当時の校長は宮戸皆遵であった。同22年町村制施行の際廃校となり船附尋常小学校に吸収合併された。

修文義校は明治6年3月、船附村に創設し、明治10年頃、大野村澁谷代衛氏の別邸を仮校舎として発足した立心第三学校を吸収合併し、大野村を校下に加えた。明治19年11月船附尋常小学校及び船附簡易小学校と改称する。明治22年、船附簡易小学校は町村制施行に伴い栗笠簡易小学校を吸収合併している。

- 明治24年10月28日 濃尾地震のため校舎破壊
- 明治26年10月 船附村他1カ村組合村立尋常小学校設立新校舎落成
- 明治28年5月 高等科設置 船附尋常高等小学校と改称
- 明治32年3月31日 船附尋常小学校を分設し、新校舎落成。  
同時に旧校舎において、船附大野区立船附高等小学校を設立
- 明治34年7月2日 船附高等小学校を笠郷高等小学校と改称
- 明治41年4月1日 船附尋常小学校に笠郷高等小学校の教科を併置し、船附尋常高等小学校と改称

- 大正7年4月1日 笠郷尋常高等小学校の設置により、船附尋常高等小学校は廃校となる  
校下戸数 800戸、 人口 4435人(男2218人、女2215人)  
尋常科 623人(男294人、女329人)  
1年 119人(男63人、女56人)、  
2年 95人(男40人、女55人)  
3年 108人(男50人、女58人)  
4年 110人(男47人、女63人)  
5年 107人(男56人、女51人)  
6年 84人(男38人、女46人)  
高等科 43人(男31人、女12人)  
1年 29人(男20人、女9人)、  
2年 14人(男11人、女3人)、  
合計 666人(男325人、女341人)

- 大正8年5月28日 新校舎建築立柱式(基礎工事後、主要な柱を建てる時に行う祓い清めの儀式)を挙行
- 大正9年2月2日 全校、新校舎において授業開始
- 昭和16年4月1日 笠郷国民学校と改称
- 昭和22年4月1日 学制改革により高等科を廃止して、中学校として分離し、笠郷村立笠郷小学校と改称  
校下戸数 857戸、 人口 4417人(男2186人、女2231人)  
児童数 570人(男292人、女278人)  
1年 111人(男53人、女58人)、  
2年 84人(男46人、女38人)

3年	74人(男36人,女38人)
4年	97人(男46人,女51人)
5年	94人(男57人,女37人)
6年	110人(男54人,女56人)

17. たかはし せんり  
高橋 千里

生 年: きょうほう 享保 二年(1717)生  
没 年: あんえい 安永 四年(1775)8月19日没  
出身地: 養老町栗笠

自宅で寺小屋を始め、習字、読書、珠算<sup>しゆざん</sup>を教える。近隣<sup>きんりん</sup>の人々だけでなく伊勢、尾張からも教えを受けに来るほどで、寺子(寺子屋の生徒)の数は五百人以上になったという。

没後七年 天明元年(1781)、門人<sup>もんじん</sup>たちが養老寺<sup>けいだい</sup>境内<sup>けんしょうひ</sup>に顕彰碑<sup>こんりゅう</sup>を建立<sup>ひぶん</sup>する。碑文は漢字ばかりで記されているので、その大意<sup>たいい</sup>(おおよその内容)を記す。

『高橋次兵衛、名は千里、字<sup>あざな</sup>(成人後につける別名)は土驥<sup>どき</sup>、号(本名の他に付ける名前)は雲華堂<sup>うんかどう</sup>、濃州<sup>のうしゅう</sup>多芸郡栗笠<sup>たぎぐん</sup>の人。多くの芸に長じ、その中最も尊円親王<sup>そんえんしんのうりゅう</sup>流<sup>しよほう</sup>の書法<sup>せいつう</sup>に精通<sup>ようきよく</sup>す。また、謡曲<sup>のう</sup>(能のうた)もよくうたった。先生に就<sup>つい</sup>て学ぶものおおよそ数百人。安永四年(1775)乙未八月十九日没<sup>あんえい</sup>せらる。没後七年、門人<sup>おつみ</sup>みんな謀<sup>ぼつ</sup>り碑<sup>はか</sup>を建立<sup>ひ</sup>することになり、私にその銘<sup>めい</sup>を請<sup>こ</sup>われる。先生は六つの道<sup>きわ</sup>を極められていたが、書はその第一で、口で言うより早く筆<sup>ふでが</sup>書きされ、字名<sup>あざな</sup>の通り俊馬<sup>しゅんば</sup>の相<sup>そう</sup>であった。筆を手から放されることはなく、名家の書法<sup>のつと</sup>に則<sup>のつと</sup>り<sup>しゅんいつ</sup>俊逸<sup>しゅんいつ</sup>な美しさだった。弟子達はみな憧<sup>あこが</sup>れ、追慕<sup>ついぼ</sup>しいつまでも忘れません。同志<sup>ひ</sup>力を合わせ記念碑<sup>こんりゅう</sup>を建立<sup>ひ</sup>し、不朽<sup>ふきゅう</sup>(いつまでも不滅<sup>ふめつ</sup>)であることを念<sup>ねん</sup>ずる。』

天明元年(1781) 辛丑<sup>しんちゅう</sup> 秋八月 尾張<sup>おわり</sup> 岡田挺之<sup>おかだていし</sup> 撰  
藤<sup>ふじ</sup> 公熙<sup>こうき</sup> 書

18. 田中 育次

生 年： 明治四十三年(1910)3月21日生

没 年： 平成十六年(2004)6月8日没

出身地： 養老町栗笠

岐阜県師範学校卒業以来「教職員」として、温厚篤実(穏やかで優しく人情に厚いこと)の質を生かし、戦中戦後の激変(急に大きく変わる事)する義務教育推進に邁進(まっしぐらに突き進む事)し、昭和四十五年(1970)3月笠郷小学校長を最後に退職。

その間、特に理科教育に情熱を燃やし。実験、観察、科学的思考と全校一丸となつての取り組みに精励(精力的に励む事)した。その功績が認められ、昭和六十一年(1986)秋、勲五等双光旭日章叙勲を受けた。

昭和四十六年(1971)五月、養老町文化財保護協会が設立されたが、その当初から理事として活躍し、特に会誌の編集を担当、同年九月にその第一号の発刊を見ている。以来、同協会の副会長、顧問として今日への継続発展に献身的な指導を下し、毎のごと如く貴重な記事の寄稿を寄せ、会員の啓発に努めること大であった。また他の編集委員と協力の上、町の生い立ちを多くの写真、図、グラフを入りの「のびゆく養老」(平成二年(一九九〇))、町の百八十余の指定文化財の写真と解説入りの「養老町の文化財」(平成四年(1992))、九里半街道をはじめ町内の五街道についての「養老町の古道」(平成七年(1995))等の上梓(出版する事)に奔走(走りまわり努力する)した。

尚、ご労作として燦然(きらきらと光り輝く事)とその業績を語るものに、養老町史がある。昭和四十六年(1971)から養老町が町史編纂(書物としてまとめる事)事業に取り掛かるや、その事務主任として日夜寝食(日常生活)を忘れて没頭専心(一つのことに集中する)し、昭和四十九年(1974)に八百余頁に亘る史料編上下、つづいて昭和五十三年(1978)に同じく八百余頁の通史編上下を完成させた。

その他、町の文化財保護条例に基づく、文化財保護審議会委員・会長、また中央公民館の郷土史・古文書講座の講師、県文化財保護協会の委嘱(その仕事を任せる事)を受けて、町内文化財巡視(見回ること)員、町の田中道(田中道)磨翁顕彰会(功績を広く知らせる会)の副会長と、絶えず文化財保護に篤い力を注いだ。

19. 玉井 五岳

生 年： 明治十一年(1878)1月2日生  
没 年： 昭和二十三年(1948)7月23日没  
出身地： 養老町栗笠

栗笠専了寺の三男として生まれ、大垣<sup>おおがき</sup> 中学校を経て第四高等学校を卒業、京都帝国大学理学部を卒業後、岐阜<sup>ぎふ</sup> 県<sup>けん</sup> 尋常<sup>じんじょう</sup> 中学校<sup>ちゅうがく</sup> 東濃<sup>とうのう</sup> 分校<sup>ぶんがく</sup> 教員<sup>きょういん</sup>、東京高等商船学校<sup>とうきょうこうとうしょうせんがく</sup> 教官<sup>きょうかん</sup> を勤めたが、再び京都帝国大学工学部電気科に入<sup>い</sup> 学、卒業後は海軍<sup>かいぐん</sup> 機関<sup>きかん</sup> 学校<sup>がく</sup> 教官<sup>きょうかん</sup> として勤め、昭和八年(1933) 停年<sup>ていねん</sup> 退職<sup>たいしよく</sup>、勲三等<sup>くんとらう</sup> を授<sup>さづ</sup> けられた。その間、<sup>かん</sup> 海軍<sup>かいぐん</sup> 教官<sup>きょうかん</sup> として大正十二年(1923)から翌十三年(1924)までヨーロッパ・アメリカ等に派遣<sup>はけん</sup> され、研究を前進<sup>かん</sup> させた。

退職<sup>たいしよく</sup> 後は京都に住み、真宗大谷派京都の私立大谷中学校、京都市立堀川高等女学校で教師として<sup>きょうだん</sup> 教壇<sup>きょうだん</sup> に立<sup>た</sup> ったが、太平洋戦争中に郷里<sup>きょうり</sup> 栗笠に帰った。

気楽に人々に接し、時には住職の代理として檀家<sup>だんか</sup> にも参り、人々から親しまれ尊敬された。

趣味として<sup>しゅみ</sup> 謡曲<sup>ようきょく</sup> (能のうた)を好み<sup>はげ</sup> 励<sup>はげ</sup> んだ。

20. 宮戸 皆遵 紀恩碑

生 年: 安政 元年(1854)11月3日生  
没 年: 大正三年(1914)3月5日没  
出身地: 養老町栗笠

牧田川堤防上に紀恩碑(功績を感謝するための石碑)が建っている。この碑は大正十年(1921)に、当時の岐阜県知事 鹿子木 小五郎の 篆額 (石碑などの上部に 篆書 で書かれた題字)、漢学者 牧野 鉄九郎の文並びに書によるものである。碑誌(石碑の文章)の内容は以下の通りである。

『小学教育は国民道德の根基(出発点、基礎のこと)であるから、その職に任ずる者はやさしく、つつしみ深く、何事にもまじめで、宮戸先生のもまじめで、宮戸先生のもまじめでなくてはならない。先生は名を皆遵といい、栗笠の柳助の長男で、幼い時から書が上手であった。明治八年(1875)に 方県郡 下尻毛 小学校の 訓導 (先生のこと、現在の 教諭と同等)となり、後に栗笠や牧田の小学校に勤め、明治三十年(1897) 安八 郡の 中 小学校の教員となり、明治三十三年(1900)に校長となったが、明治四十一年(1908)に中小学校は名森村立名森 尋常 高等小学校中 分教場 となったので、名森小学校の教員として引続き勤めた。没後は、中(中は明治三十年(1897)に名森村に合併しその 大字 となった)の墓地に 葬られた。』

中や栗笠の教え子たち及び有志によって碑が専ら寺 境内 に 建立 された。後、先生の住居のあった場所に移転され、その後も牧田川 堤防 改築 のため場所を移転した。

21. 両江悪水落江と伏越樋

耕地整理前には、栗笠の南から上<sup>かみおおの</sup>大野へかけて太い水路があった。これは隣の輪中が悪水を流す排水路で、江月<sup>えつき</sup>輪中<sup>わちゅう</sup>と烏江輪中<sup>からすえ</sup>の二つの江(江月と烏江の江)をとって、両江悪水落江(通称よげた)と呼ばれた。

江月輪中では、周りを四つの天井川(川底が輪中の中の土地より高い川)で囲まれているので排水ができず、元文五年(1740)牧田川の川底を横断する伏越樋(水筒サイホン、木の板で四角形の筒型トンネル)を作り、烏江輪中の落江へ落させてもらった。烏江輪中では寛保<sup>かんぼう</sup>年間(1741~1744)に金草川を伏越<sup>ふせこ</sup>して、栗笠から大野まで2300mの悪水落江を作って、伊尾川(揖斐川)へ自然排水をする工事をした。当時の技術では川底に木で作った水筒を伏<sup>ふせこ</sup>込んで水を通すことはたいへんな工事であった。

更に天明五年(1785)には、二つの輪中(江月輪中と烏江輪中)が共同で悪水落江を丈夫に改修したり、落江を通してもらうための年貢<sup>ねんぐ</sup>(江代米)を、栗笠村・船附村・大野村に払う規約を結んだ。

この悪水路は、昭和七、八年頃、江月輪中に排水機が設置されたため、伏越樋は取除かれた。なお、栗笠・大野間の悪水路は用水路として利用されていたが、昭和三十五年から始まった耕地整理(土地改良工事)で、取り払われて田地となった。

なお、月の輪のある塚樋は現在では非常に珍しく、この塚と上之郷地内の二基だけが養老町内に残っている。

伏越樋とは、大きな川の底を掘り割って、桧や松の厚い板で四角い水筒(水の通り道)をうめこんで川底を横断する形で水路を作るもので、機械のない当時としては、想像をこえる工事であったと思われる。

(悪水 : 農地に使った後の水や、家庭等からの排水、

落江 : 使用済みの水を川や海へ流す排水路、

塚樋 : 河川から引水するために堤防に築いたトンネルで、昔は木で作ってある水路

樋 : 池水や河水を放出・流<sup>りゅうか</sup>下させる水門のこと)

## 参考文献

1. 養老町史
2. のびゆく養老町(養老町教育委員会)
3. ふるさと笠郷(養老町教育委員会)
4. ふるさと笠郷のいしぶみ(養老町教育委員会)
5. 笠郷地区史跡説明書(養老町教育委員会)
6. 栗笠の獅子舞(養老町教育委員会)
7. 近江歴史探訪マップ4(米原市教育委員会)
8. めざましい先人(養老町教育委員会)
9. 養老町の古道(養老町教育委員会)
10. 近世における揖斐・長良・木曾川の舟運について(高牧 實)
11. 100年前の共立女子職業学校の生徒について(徳田 誠志)
12. 九里半街道・伊勢西街道 牧田宿(九里半歴史文化回廊)
13. ウィキペディア



専了寺がまだ勢至にあった頃、織田信長に勢至一帯が焼き討ちに遭ったことが記されている。(本能寺の変4ヵ月前)

てんしょう じんごとし ちゅうじゅんころ へいらん たびたび ところ たぎ がらん  
天正十壬午歳(1582)二月中旬比織田の兵亂(兵乱、戦乱)度々に及ぶ處、既に多藝西山伽藍(寺  
院建造物)放火の噂。不慮に當院へ亂込み詮方(しかた)なく早鐘を鳴すといへども面々蜘蛛の子の散るが  
如く逃げ隠る。爰に譜代三四郎と檀頭越前浪人芝田修理の族川口瀬兵衛勢州龜山殿御國替の生駒  
かいえき ちぎょう このち じゅうきよ  
改易病氣申立て元知行の格式にて此地へ住居すと。然る所生駒主馬名字改安田監物と改名す。此一族近藤  
ひょう すんぶ しぶやにゆうどうきねかずつげ のきば えいぞう  
并に駿府(静岡市)浪人澁谷入道實和續て西脇姓當寺專教檐端へ影像を持出して本願寺大僧上の御  
はんもつ ふべん きょうとう はせきた きゅうせんてつほううちか  
判物拜見の上とまふす處へ、前後不辨の勇利の郷黨(同族の者)馳來り、弓箭鐵砲打懸け暇なければ其  
りんり ひびき や あまつき すす  
音隣里に響て此時專教流れ箭に當り剩へ鐵砲の磨り(摩り)を受けて忽ち絶命す。然るに女房即時に影像を卷  
ひさし ぬい いがい かんにん  
去り私坊の檐を切り抜て遺骸を隠し置き、長刀を以て堪忍しがたく在番する故心ソバロなれば同夜四更の頃三  
五夜中の月影に專教死骸を持出し二重堀の間に三四郎に埋ませ、印の松を植ゑ置き、寶物ばかり取出し衣服珍器を振  
り捨て、夜も曉更に及びぬれば、翌る十六日辰の一天に御影并に道具押シテ古園を指て落行く而已。(或一説彼女  
房敵中エ亂人軍賊所持ノ長刀奪取り兩三人頸打落獅口ヲ遁レ虎ノ尾ヲ踐ム心地シテ危キ命助去)爾時に群屬これを見  
て即時に散去す。

こ  
爰に老父教存骸番一宿を加して井尾江指て逃行く、跡追教存所持の鳥目三貫文譜代與四郎と三人忍び去る處、軍  
徒これを見付け腹帯の鳥目も奪取られ、危命遁れ井尾を便り行程に、十餘町を過て振還りみるに、佛閣五間四面井に私  
房添屋迄放火一時に灰燼となれば、教存途中に立留り與四郎にいふやう猶如火宅の金言眼前なり。兎角この里に居住  
するに依てかゝる騒動にも逢ひければ危きをみて退んにしかじ、君子は岸上の本に立ずといへり。速疾に井尾江々と  
急ぎ到着かの女房を尋るに古園江歸らざる所定て軍賊にかどはかされて空くなん哉。此時傳來の祖師御眞影并御代御  
繪像紛失所在をしらず云々然る間數日の旦頃日世上穩になり、加之四月十日は雲慶怯印の月祥なれば同上旬の比  
適々寺院の危亡を窺んため、教存三四郎と吉郷江歸り境内をみるに哀なる哉、佛閣私坊鐘樓堂・撞鐘も打碎き灰葭の  
野原と成る。殊更この撞鐘は隣里八郷急難の節陣鐘とて四十九年前將軍義晴公治世の比領主より自銘の鐘を微盡に  
碎き、哀れなる涙連々として言葉もなき風情なり。爰に不思議や結構なる絹裏の小紋紙子灰中にこれあれば三四郎拾ひ  
上げて、天より與へたまふと頂戴し、早速老父教存に着せ置き、併ながら立体ふ所もなく寺跡より、坤の方松柏繁茂の貴  
船森社に千萱を引寄せこも張して、歳霜を送る内に有縁無縁の檀施を以て芝庵に葎戸たて、春秋を送り、幽栖をいと  
む。時に專教天正十壬午曆二月十五日不幸に絶命す。年齢三十七歳。(延享五戊辰(1748)専了寺住職六十一歳  
正月下旬清書)